サラ・ミッシェル・ゲラーの玉潰し

The Tournament by dbud

「しかし、ミス・ゲラー、ここでいったい何をなさろうと？」

大男はためらいがちに言った。

「戦うのよ。それがどうかしたの？　私はトーナメントに出場しに来たの。すぐに出場の手続きを頼むわ」

男は、傍らの同僚二人を見やり、居心地悪そうだった。みな、黒い道着を羽織った大男たちだ。

「ルールはご存じですか？　接触あり（フルコンタクト）、反則なし（ノーホールズバー）、防具なし（ノーパッド）のキックボクシング大会なんですよ」

「ぜんぶしってるわ。これでもキックボクシング歴は長いのよ」

「いや、しかし通常はお断りしてるんですよ。つまりその……」

「つまりその何よ？」

ブロンドの小柄な少女は、侮辱されたように言った。

「女の子って言いたかったわけ？　もし、そうだとしたら、どんな手を使っても後悔させてやるけど、いいの？」

「いえいえ、そんなつもりでは決して。ただ、あなたが怪我をするようなことになれば、我々としても、大きなトラブルになりますので」

「私を入れなかったら、もっと大きなトラブルになるわよ。有名人を怒らせると、どんな事になるか、知ってるんでしょうね」
サラは男の胸を指でつつき、脅迫した。
「お待ちください。ちょっと相談しますので」
三人の男は数メートル離れた場所に移動し、ひそひそとささやきあった。
サラは静かに待った。
彼女がこの非合法すれすれのトーナメントを知ったのは、昨日や今日のことではなかった。ロケの際にスタッフの一人からそれを聞いたとき、彼女は飛び上がらんばかりに喜んだ。表向きは愛らしいイメージを振りまき続けている彼女が、実は人をうち負かす（とくに男を）ことが大好きなことを知る人間はごくわずかだった。
はたして会場に来てみると、マスコミ関係者は皆無だった。秘密の大会だから当然だろう。願ったりかなったりの条件だった。
三人の男たちが相談している間、彼女は周囲を見回した。
そこは古びた倉庫だった。中央にリングがしつらえてある。通常のボクシングリングより若干小さい。その周囲に百人ほどの客。誰も目深にベースボールキャップをかぶった彼女の存在には気づいていないようだった。

やがて、さきほどの男が戻ってきた。
「いいでしょう。出場を認めます。出場枠がひとつ空いてましたから。今日の出場者は八人の勝ち抜き戦。二試合続けて勝てば決勝戦です。ただ忘れないでくださいよ。相手はみな、あなたより３０～４０キロは重い男ばかりです。防具はいっさい認めません。これまでの例でも、怪我をしなかった敗者はいません。鼻を折られる、歯を折られる、いやもっとひどい怪我をした者もいます。ルールはありません。従って反則も存在しない。それでもいいですか？」
サラは、明るくうなずいた。
「もちろんよ」
「では誓約書にサインしてください。ジムが案内します」
ビール腹の大男が、彼女を倉庫の奥に導いた。
誓約書は数ページに及んでいたが、要するに、どんな怪我をしても訴えないと約束させられたのだ。
彼女はロッカールームにひとり、残された。バッグから道着を取り出し、着衣を脱いで下着姿になり、鏡に映った自分の姿にしばし見とれた。
彼女は小柄で、ヒールを脱ぐと１５０センチをわずかに越えるだけだ。ボディビルダーのように腕を折り曲げてみた。スタイルを保つため、なるたけ小食を通し、トレーニングを欠かさなか

った。スリムな細い体つきにもかかわらず、筋肉がしなやかに盛り上がった。引き締まったウェスト。だが、売り物の豊かな胸だけはしぼまないよう、細心の注意を払っている。
たしかに見かけだけなら、彼女の倍以上の体重のある大男を相手に勝ち目はない。だが、彼女には自信があった。相手を痛めつけるすべは、ちゃんと心得ている。
「考えるのは後でいいわ」
彼女はひとりごち、着替えを始めた。
ロッカールームの外で、二人の選手の名前がアナウンスされ、ついで観客の歓声がわき起こった。
彼女は気にもとめず、緊張したふうもなく、ストレッチをやり、キックと車道ボクシングを繰り返した。

４５分後。ドアがノックされた。
彼女はロッカールームを出た。
不意に会場は沈黙に包まれた。観客たちの視線が、いっせいに彼女に注がれている。
やっぱりそうだ……たしかに彼女だ……うそだろ、おい……ほんとにバッフィだ……ちっちぇえなあ……ほんとに試合するのかよ……
リングにあがる間、そういうささやきが耳に入ってきたが、彼女は無視して、リングにあがった。

大歓声がわき起こった。
客の数は三百人ばかりに膨れあがっていた。リング中央の司会者が、アナウンスを開始した。
「さあて、いよいよ注目の一番です。赤コーナー、身長１９１センチ、体重２２０パウンド、ダレン・ホワイト！　そして青コーナー……」
司会者は、しばし、言葉をとめた。
「……初の女性出場者です。身長１５５センチ、体重は……不明。みなさんよくご存じのサラ・ミシェル・ゲラー！」
観客が怒号を張り上げた。サラは微笑んだ。観客は明らかに、彼女を応援している。
サラとダレンはリング中央に進み出た。司会者が確認する。
「ルールは知ってるね。そんなものはない。自分の身は自分で守ること。では健闘を祈る」
ダレンが進み出て、彼女を見おろし、にやにや笑った。筋骨隆々の大男である。
「かわいいな。似合うぜ」
彼女は、箱から出したばかりのような、皺ひとつない真っ赤な道着を羽織っていた。下半身は、プロレスラーが穿くような、小さなパンツ。二人とも、ブーツに膝パッドをしていたが、手にはグローブは付けず、パッド入りの指ぬきだけをはめていた。
「手加減してやるから安心しな。そのかわいい顔をずたずたにするのは、誰も望んではいないだ

ろうからな」
彼はあざけるように投げキッスをよこした。サラは作り笑いを浮かべた。
「コーナーに戻って」
司会者が言い、リングを降りた。
リングには、大男と小柄な少女だけが残った。
ゴングが鳴った。試合開始。

サラは小さな拳を固めて顔面をガードし、勢いよく中央に進み出た。ダレンは、自信たっぷりの様子だった。彼はリングを歩き回りながら叫んだ。
「お嬢ちゃん、覚悟はいいかい？」
そして、不意打ちを食わせた。ダレンの巨体が彼女にタックルし、彼女は尻餅をついた。だが次の瞬間、ダレンの身体が硬直した。サラは倒れざまに足を真上に突き出していた。その足裏が、ダレンの両脚の付け根に打ち込まれ、二つの睾丸を押しつぶしたのである。
ダレンは前のめりに倒れ、ロープを掴んだ。膝をつき、右手でロープを、左手で股間を押さえている。
観衆が沸いた。サラは客席に向かって微笑みを浮かべ、大男が回復するのを余裕の表情で待っている。

ダレンが立ち上がるのに数分を要した。やっとロープにすがって立ち上がり、サラに向けた顔は屈辱で真っ赤に燃えていた。
ダレンは立ち上がると、いくつかのジャブを放ったが、いずれもかわされた。ダレンは焦って踏み込み、右ストレートを放った。サラにとって思い通りの展開だった。彼女はさっと横っ飛びにかわすと、相手の足首を払った。
ダレンは仰向けにひっくり返った。両足が大きく開き、股間ががら空きだった。
サラは、思い切りその睾丸を踏みつけた。
「ぎゃあああああ！！！！！」
ダレンの絶叫が響き、彼が両手で股間を押さえて転げ回った。

客席は静まり返った。
リング上では悶絶して立ち上がることもできない哀れな大男を、小柄な少女があざけるように見おろしている。観客のほとんどは男性だけに、ダレンの苦しみが理解できるのだ。
……玉を蹴りやがった……わざとだ……痛そうだ……とんでもねえ女だ……
「反則だ！」
叫び声があがった。
さきほど、入口でサラと言い合っていた大男が、リングにのぼってきた。

「なんてことしやがるんだ！」
「わ……わざとだ……」
ダレンが苦しげな息の下で呻いた。
「反則ってどういう意味よ！」
サラは司会者に向かって聞いた。
「ノーホールズバーでしょう。ルールなんかないって言ったよね」
「あ、ああ……」
司会者は困惑気味に答えた。サラは大男に向き直った。
「あんただって言ったよ。反則はないって」
「でも、急所を狙うのは……前例がない」
「だからなんなのよ？　反則はないんでしょ？　だったら金玉を蹴ったって反則じゃないんじゃないの？　それともこのデカブツは、ルールに守られないと小さな女の子ひとり、扱えないってわけ？　そんな弱虫、さっさと道着を縫いでリングを降りればいいんだわ！」
観客がどっと笑った。
「し、しかし……」
リング上の大男と、司会者は顔を見合わせて反論できずにいる。
「うるせえ……てめえら、どいてろ」

ダレンがよろよろと起きあがった。
「こうなりゃ手加減はしねえ……叩きのめしてやる……」
膝はがくがくしていたが、表情は怒りに燃えていた。
「その調子よ」
サラは微笑み、大男に向かって怒鳴った。
「さっさと出ていかないと、あんたの金玉、蹴り潰すわよ！」
客席がまた沸いた。

試合が再開されたが、冷静さを失ったダレンは彼女の敵ではなかった。
幾つか繰り出したパンチはすべてかわされ、逆にみぞおちに彼女の小さな拳がめりこんだ。ダレンが「ううっ」と呻く。つづいて脇腹に蹴りが炸裂した。ダレンは膝をついた。サラの膝が、彼の顎を蹴り上げる。ダレンは口から血を噴いて尻餅をついた。唇から血とともに歯が何本かマットに落ちた。
ダレンはもはや、立っているのがやっとだった。二度の金蹴りで彼の中枢神経は麻痺し、下腹部が異様に痛み、脚は思うように動かない。顎への一撃で、視界はかすみ、脳はもやがかかったようだった。
サラは、そんな彼の状態を見抜いていた。右足を軽く後ろに引き、それから思い切り蹴り上げ

た。
つま先が彼の睾丸にまともにめりこんだ。
ダレンは絶叫し、腰を折り曲げた。
すかさず次のキックが、彼の顔面を襲った。ダレンの両手は股間を押さえていたから、顔面は無防備だった。
ダレンの背中がコーナーポストに叩きつけられ、彼はぐにゃりとそのままくずおれ、尻餅をついた。
サラは駆け寄ると、彼の顔にパンチを浴びせた。ダレンは両手をあげて防いだ。今度は股間が無防備になる。
サラは両手を広げてロープをつかむと、思い切りジャンプし、両足をロープの上に載せてすっくと立った。
彼女の視線は、真下の標的に向けられた。半ば意識を失ったダレンの両手は顔面を防御し、その部分はだらしなく広げられている。
サラは、反動をつけてロープから飛び降りた。

ダレンの喉から、甲高い悲鳴が迸り、やがて消えた。
彼は背中をコーナーポストにつけたまま、恐怖に目を見開いている。

サラは、彼の脚と脚との間に、彼にお尻を向けて立っていた。
その踵は、彼の両脚の付け根を押し当てられていた。踵とマットの間に、彼の睾丸が二つ挟まれていた。
サラは着地する瞬間、踵を少し浮かせていた。彼女の「お情け」で、睾丸は消滅を免れたが、ダレンは恐怖のあまり、動くこともできなかった。
サラはにやりと笑い、踵に体重を乗せ始めた。
「やめてくれえええええ！！！！！！！！」
ダレンが悲しげに絶叫した。
「潰れる！！！！　潰さないでくれえ！！！！」
客席から失笑と、同情のため息が漏れた。
「うるさい！」
サラは、ダレンの喉にひじ鉄を食わせた。

「さ、続きをやりましょ！」
サラは、尻を突き出して片手で股間を、片手で喉を押さえてむせかえるダレンの腕をつかんで起こし、リングの中央まで引きずった。
「ま……待て……」

ダレンは涙目で言った。
「ギブアップだ……降参する……」
ゴングが鳴らされ、司会者がリングにあがってきた。
「待って！」
サラは叫んだ。
「ルールがないってことは、降参のルールもないってことだよね？　認められないわ！」
観客がどっと湧き、彼女の賛意を表した。ダレンは、惨めな表情で彼女を見上げた。司会者はまたも困惑して周囲を見回していたが、観客が試合続行を望んでいることを知ると、肩をすくめてリングから降りた。
「さ、すぐに立って」
サラは、右手の拳を左手の掌に打ち付けた。
「勝負はこれからよ」
ダレンはあきらめて立ち上がったが、膝は恐怖と苦痛で震えたままだった。もはや、歩くのも困難だったのだ。
サラは腰をかがめると、回し蹴りを放った。彼女の足は頭上高く旋回し、ダレンの後頭部を襲った。ダレンはのけぞった。同時に彼女は股間めがけてアッパーカットを放つ。
ダレンはもはや悲鳴をあげることもできなかった。股間を両手で押さえ、顔を苦痛でゆがめ、

尻を突き出してよろよろと歩くだけだった。サラは容赦なく、彼の顎に三度、パンチをたたき込んだ。
ダレンの身体が大きく揺らいだ。サラは彼の頭髪を掴んで引っ張り上げると、二度続けて股間に膝蹴りを浴びせた。
彼女が手を放すと、ダレンはだらしなく、マットに四つん這いになった。サラはその背後に回り、彼のトランクスに手をかけて、一気に膝までおろし、両手で剥き出しの陰嚢を掴んだ。
ダレンは激しく号泣していた。抵抗する力は残っていない。懇願する気力すらなかった。慈悲を乞うても無駄なことは、もはや分かり切っているのだ。
サラは、膝を彼のふくらはぎに乗せて動けないように押さえつけ、全身の力をこめて、睾丸をひねりあげた。
「ぐぁあああああああああ！！！！！！」
ダレンの口から、断末魔の悲鳴が迸った。
ばたばたと両手を背後で動かして、なんとか彼女を押しのけようとしたが、横幅の広い筋肉質な胴体が邪魔をした。両足はしっかりと押さえつけられている。
サラは両手にさらに力を込めながら、大きく背中をのけぞらせた。まるで陰嚢を引きちぎろうとするかのようだった。

観衆はもはや恐怖を通り越し、陶酔にひたっていた。ダレンの絶叫は、興奮した歓声にかき消された。

ダレンはもはや逃げられぬ運命を悟った。

両手を前であわせ、お辞儀をするように額を何度もマットに打ち付けた。

だが、冷酷なサラは、降伏を受け入れる気はなかった。一分後、彼が完全に意識を失うまで、陰嚢を引っ張り、睾丸をひねりあげ続けたのだ。

いな、彼がマットにうつぶせにくずおれてからも、彼女は睾丸にめり込ませた指を、さらに深くめりこませ続けた。激しく痙攣していた彼の全身が、ぴくりとも動かなくなって初めて、彼女は立ち上がった。

勝利に拳を宙に突き上げる彼女を、観客は立ち上がり、拍手と歓声で褒め称えた。

二回戦が行われたのは、その４５分後だった。

今度の対戦相手は身長１７５センチ、体重８０キロのジョンだった。白い道着に素足。サラも彼にあわせて素足になった。

ジョンはさすがに、警戒していた。ゴングが鳴っても、軽くステップを踏むだけで、なかなか攻めてこない。二人は対峙しあったまま、同じ距離を保って円を描いた。たまに軽い蹴りやジャブを放ったが、相手に命中しないことは承知の上の様子見だった。

観客が、なかなか始まらない撃ち合いにいらだち、ブーイングが起こったころだ。

サラはいきなり、身体ごとジョンにぶつかっていった。

思いもかけぬ不意打ちにジョンは対処できなかった。仰向けに倒れたジョンの上に、サラは馬乗りになった。胸板を膝で押さえつけ、ジョンの顔面に立て続けにパンチを浴びせた。彼の口から血が迸った。

だが、小柄な彼女のパンチはさほどのダメージは与えていなかった。ジョンは両手で彼女の袖をつかむと、巴投げを仕掛けようとした。だが、サラはすばやく身体を横に倒し、マットに肩をつけてかわした。同時に、相手を横倒しにした。二人はマットに横になったまま、向かい合う形になった。

サラがにっこり微笑んだ。同時に、彼の股間に膝をたたき込んだ。

ジョンは悲鳴をあげて、彼女を突き飛ばした。

サラはマットに転がり、すぐに立ち上がった。

ジョンは起きあがろうとして激痛のために立てず、股間を両手で押さえて座り込んだ。

涙ににじむ目で見上げると、サラは立ち上がり、嘲笑を浮かべながら、おいでおいでと手招きしている。

ジョンはようやっと立ち上がった。サラは再び、その股間に蹴りを浴びせた。

予測した攻撃だった。ジョンは横っ飛びにとんで避けた。
だが、その防御も読まれていた。彼女は振り上げた脚をそのまま横に払った。踵が彼の脇腹を撃った。息が詰まった。動きが止まった。
次の瞬間、彼女は思いきり、脚をはねあげていた。つま先が彼の睾丸に打ち込まれた。
「ぎゃあああああああ！！！！！！」
彼が悲鳴をあげるより早く、二発目の蹴りが同じ箇所にたたき込まれた。
ジョンが前のめりに倒れる寸前に、彼女は彼の傍らに駆け寄り、右腕をつかんでねじあげた。肩の関節が外れそうに痛んだ。その姿勢のまま、鳩尾に立て続けに五発、蹴りを浴びせる。息が完全に詰まり、嘔吐がこみ上げた。
サラは手を離した。ジョンの腰が落ちる。その落下点にサラは膝をつきだした。彼の睾丸がまともにサラの膝小僧に落ちた。
ジョンは絶叫し、股間を両手で押さえ、マットに転がり悶絶した。全身が激しく痙攣し、たくましいその身体はコントロールを失った。やっと動きが止まった後も、彼はうつぶせに股間を押さえてうずくまり、激しく号泣していた。
観客は、彼女がさらに残忍な攻撃を加えることを期待したが、サラは司会者に、試合終了を促した。ゴングが鳴らされた。

観客の歓声が鳴り響く中、サラはリングにあがった司会者に言った。
「時間がもったいないわ。すぐ次の試合にしましょう」
観客がまたもどっと沸いた。
いよいよ決勝である。

次の相手は、身長１８０センチ、体重９０キロのポールだった。道着はつけず、だぶだぶのトランクスだけで、盛り上がった胸板を見せつけている。
サラは彼に合わせて道着を脱ぎ、白いタンクトップひとつになった。
司会者が紹介を終えてリングを出ると、ポールは手をさしのべてきた。握手するつもりだろう。サラが手を出そうとした瞬間、彼の掌が飛んできた。
いきなりの平手打ちだった。頬が赤くなり、目に涙が溢れた。ゴングが鳴った。ポールのキックが飛んできた。
サラは思わず後ろにとびずさった。背中にロープが当たり、大きくバウンドしてはねかえった。ポールは彼女の腕をつかんで受け止め、鳩尾に膝蹴りを浴びせた。
「ううううっ！」
彼女はうめいた。すかさず、今度は股間に膝が突き上げられた。

「どうだい。股間蹴りされるのは初めてか？」
耳元でポールのあざけり声。サラは、両手で股間を押さえて膝をついた。
女性の股間は、睾丸のように痛みは長引かないが、敏感な箇所で、しかも恥骨にもろに当たるだけに、一瞬の衝撃は大きい。息が詰まった。涙が滝のように流れ落ちる。ポールは、快復の時間を与えるつもりはなかった。彼女の脇腹を思い切り蹴った。あばら骨が一本、砕ける音が響いた。さらに腕をつかんで彼女の小柄な身体を引っ張り上げ、コーナーポストに投げつけた。ひどく背中を打った彼女がくずおれる前に、肋骨にパンチをたたき込み、さらにマットの中央に叩きつけた。

仰向けに倒れたサラに馬乗りになったポールは、右腕で彼女の喉笛を締め上げた。サラは激しく顔を左右に振り、両手でポールの右腕をつかんで引き剥がそうとしたが、力ではかなわない。次第に意識が薄れはじめた。
ぼうっと視界が霞んだ。体中にアドレナリンが充満し、眠りに落ちる寸前の心地よさに身をゆだねそうになった。

だが、彼女の意識はあきらめかけていても、彼女の身体はあくまでも抵抗した。
彼女は無意識のうちに、裏掌をポールの顎に突き上げていた。

ポールは思わずのけぞり、彼女の喉をつかんだ手をゆるめた。
呼吸が戻り、視界が広がった。
同時にポールは大きな間違いを犯した。彼は、彼女の喉から手を離し、体勢を整え直そうとしたのだ。
一瞬の隙を彼女は逃さなかった。
彼女の膝が突き上げられた。睾丸に命中した。
「ぐお！！！」
ポールが呻いた。
サラは数度、たてつづけに蹴り上げた。彼女の喉を絞めようとしていた彼の両手が、股間に向かった。サラは、その両手首をつかみ、さらに膝を突き上げた。ポールは腰を浮かして逃げようとした。バランスが崩れた。
サラは彼の腕をねじって横倒しに倒し、さらに仰向けに転がして、今度は彼女が馬乗りになった。彼の両手を彼のあつい胸板の上に押さえつけ、何度も何度も、膝を睾丸にたたき込んだ。

サラは起きあがった。
ポールは股間を両手で押さえ、激しく身体を左右に振って悶絶している。
彼女自身、立っているのがやっとだった。折れた肋骨が激しく痛み、口から血が流れ出ていた。

ポールが快復する前に、けりをつけねばならない。
彼の傍らに膝をつき、右手で喉を押さえつけ、左手で彼のトランクスのなかに手を突っ込んだ。喉笛に指を食い込ませた。呼吸を妨げられたポールは苦しげに顔を振った。左手の指を彼の睾丸に絡ませた。思い切りひねりあげた。
ポールの全身が激しく波打った。彼はサラの手を払いのけようとしたが、彼女はしっかりと喉笛と睾丸を掴んで離さなかった。
耐え難い激痛が、すでに腫れ上がった彼の睾丸を襲った。息も出来ぬまま、彼の頭部は激しく揺れ、瞳は眼球の裏側にめりこんだ。このままいけば、ポールは気を失うだろう。だが、それで放免してやるつもりはなかった。
この男には、さらなる苦痛と辱めを与えねば、気が済まない。

サラは手を離すと、彼の両脚を押し広げ、その間に膝をつき、トランクスに手をかけて引きずりおろした。
真っ赤に腫れ上がった陰嚢とペニスが、観客の眼にさらされた。
観衆は息をのんで、小柄でサディスティックな美女が、次ぎにどんな責め苦を与えるのか見守っている。

サラは、完全にトランクスを脱がせて放り投げた。
それからコーナーポストによじ登った。
見おろすと、ポールのぶざまな裸体が、３メートル先に転がっている。その両脚は大きく広げられたままで、無惨に傷ついた性器をさらけ出していた。
ポールは、次第に意識を取り戻し、うつろな眼でサラを見上げていた。これから何が起ころうとしているのか、彼の朦朧とした脳には把握できないようだった。
彼が、彼女の計画を察知して悲鳴をあげたのは、彼女がポストから飛び降りた瞬間だった。
「やめろぉぉぉぉ！！！」
つづいて、ぐしゃっという嫌な音。

ポールの眼が飛び出しそうに見開かれ、口が大きく開いたが、悲鳴は漏れてこなかった。
反動で、彼の上半身が起きあがり、そのまま硬直した。
サラの両膝は、彼の睾丸の上に着地していた。
彼女の全体重が、彼の睾丸を二つとも押しつぶしていた。

サラの顔と、ポールの顔は、２０センチほど離れて向かい合っていた。
ポールの眼は見開かれたまま動かない。

サラの瞳が、ゆっくりと下に降りた。その視線は、彼女の膝小僧の下に向けられた。
ポールの陰嚢は破裂し、血と精液と睾丸の残骸が流れ出していた。
ポールの上半身がゆっくりと仰向けに倒れた。

彼のペニスは、最後の抵抗を示すようにそそり立っていた。だが、その先端から血と精液が溢れだしていた。
サラはじっとペニスを見つめた。やがて出せるだけの液体を吐き出したように、堅く屹立した肉棒はしぼみはじめ、こうべを垂れた。
負け犬が、敵に恭順の意を表して尻尾を垂れるように。
「完璧ね」
サラはほくそ笑んでつぶやいた。
「もう二度と使い物にはならないわ」

彼女は立ち上がり、左手で肋骨を庇いながらリングを降りた。
観客もスタッフも、彼女の残忍な仕打ちにショックを受け、水を打ったように静まりかえっている。
彼女は、入り口で言い争った大男の傍らで足をとめ、いきなり彼の睾丸をぎゅっと掴んだ。大

男は喉の奥で悲鳴をあげ、顔をゆがめた。
「怪我しても訴えないって誓約書、あの男もサインしたんでしょう」
大男はがくがくと顎を動かした。恐怖に全身が細かく震えている。
「じゃ、文句ないわね」
サラは、彼の股間から手を離し、ロッカールームに向かった。
大男は思い出したように、他のスタッフに向かって叫んだ。数人のスタッフがリングの上に駆け上がり、硬直したポールの身体を運び出した。ぼろきれのようになった彼の身体がストレッチャに乗せられ、ロッカールームに消えた瞬間、観客がいっせいに叫んだ。
「サラ！　サラ！　サラ！　サラ！」